

板書 (本文)

源氏物語 紫式部

桐壺

作者 作者

帝の妻

謙 帝 尊 女御 更衣

作者

いづれの御時にか、女御更衣あまた候ひ給ひける中に、

身分

打消体
「す」

寵愛を
受ける
尊 桐壺

きは

いぢやむじとなき際にはあらぬがすぐれて時めき給ふ

過去終

「けし」

ありけり。

作者

時めへへし

他の女御たち
尊 他の女御たち

作者

はじめよりわれはと思ひあがり給へる御方々、

桐壺更衣

尊 他の女御たち

めめまごち書しおとしめそねみ給ふ。

身分

身分の低い者

打消終
「ず」

同じほど、それより下の更衣たちはましてやすからず。

他の女御たち

朝夕の宮仕へにつけても人の心のみ動かし、

過推体
「けむ」

恨みを負ふつもりにやありけむ、いとあしくなりゆき、

打消用
「ず」
帝は

もの心細げにお里がちなるを、いよいよ飽かず

批判 非難

作者

そし

尊敬用 帝
「ず」
打消用

強意 推量
「ぬ」
「へ」

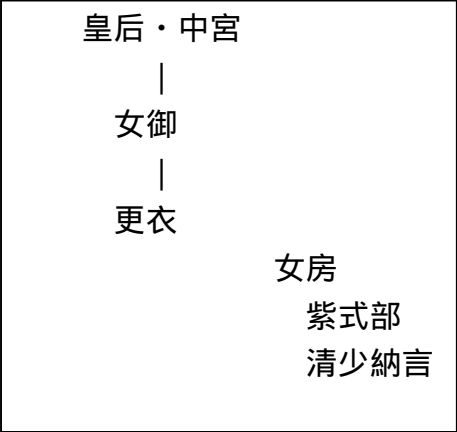
断定終
「なり」

あはれなるものに思ほして人のりをも

え憚らせ給はず、世の例しにもなりぬへき御もてなしなり。

ははか 二重敬語

ため



先生が来た。 おこしになった

来られた

いらっしゃった

お来になる

生徒は先生の話聞いた。 お聞きした

うかがった

お聞きなされた